

2009年12月1日発行

秋田大学

国際交流センターニュース 創刊号

Akita University International Exchange Center News

発行者： 国立大学法人秋田大学国際交流センター 〒010-8502 秋田市手形学園町1-1
<http://www.pcix.akita-u.ac.jp/inter/> 電話：(018) 889-2856 kokusai@jimu.akita-u.ac.jp

- ・国際交流センターニュース創刊によせて(1)
- ・新たに留学生12名が秋田大学へ (1)
- ・農家に泊まろう―農業体験ツアーほか (2)
- ・世界各地の協定校が秋田に集結 (2)
- ・新たに4大学と国際交流協定を締結 (2)
- ・国際交流を後押し―教育研究高度化支援体制整備事業 (3)
- ・専任教員からひとこと―牲川波都季 (3)
- ・国際交流センター・スタッフ紹介 (4)
- ・お知らせ―留学生のみなさんへ (4)
- ・Information for International Students(4)

○ 国際交流センターニュース創刊によせて

田中俊誠 (TANAKA, Toshinobu)

この度、定期的に国際交流センターニュースが発行されることになりました。喜ばしい限りです。

かつて、秋田大学におきましては、「学内体制の整備及び優れた留学生受け入れ実績の不備」を理由に、国際的規模のプロジェクトへの応募が悉く採択されない時がありました。学内体制の早急な整備が必要との判断から、平成20年2月13日開催の教育研究評議会・役員会におきまして国際交流センター設置が承認されたのであります。

設置後、1年9ヶ月が経過し、その間専任教員が1名配置され、数名の事務系職員も加わり、創刊ニュースにも紹介されておりますように、センターは独り秋田大学のみならず県内の他大学の留学生のために、そして秋田大学全体の国際化のために、活発に活動しております。

手前味噌になるかもしれませんが、私自身は、私を除いたセンターに関わりのある全ての職員及び教員の能力、そしてセンターの業務内容を非常に高く評価しております。

しかしながら、残念ではあります。今一つ顔がはっきり

見えてこない”が、ちよくちよく聞こえてきます。私が専属のセンター長ではない、即ちその任務を果たしていないことが原因であるのは、誰の目にも明らかであります。センターで汗を流して懸命に働いている皆さんに申し訳なく思っております。残り4ヶ月の私の首を挿げ替えるのは得策とは思えません。だからと言って、何か行動を起こさない限りは、センターに対するマイナスのイメージを払拭できません。センター全員の知恵を働かせた結果が、国際交流センターニュースの誕生に繋がったのです。“もっと積極的に国内外に向けて発信しよう”との気運も湧き上がってきております。英語版の発行も夢ではないと思います。

国際交流センターニュースの発行が、吉村（秋田大学長）プラン及び平成22年度からの中期計画に盛り込まれております。「外国人留学生受け入れ200人を目指し、受け入れのための学習・生活環境を整備する」の達成への起爆剤になってくれることを切に願っております。

(国際交流センター長)

○ 新たに留学生12名が秋田大学へ

10月から新たに12名の留学生が秋田大学に入学しました。今回は例年に比べ少ない新入生の数でしたが、ポツワナ、フィリピン、ベラルーシやアメリカなど新たな国も加わり、これで秋田大学は18の国と地域から合計128名の留学生を迎えたことになりました。

10月5日（月）に開催されたオリエンテーションでは、まだ日本語が不十分な留学生もいましたが、これからの留学生活に必要な情報を聞き漏らさないようにと、国際交流センターからの日本語教育に関する説明や、保健管理センター所長のお話などに緊張した面持ちで耳を傾け、一所懸命に聞いていました。

また、入学後約1ヶ月が経過した11月7日（金）には、留学生会館を会場に、先輩留学生が中心となって、中国、韓国、ベトナム、モンゴル、日本の5カ国の料理を振る舞い、新入生を歓迎してくれました。11月に入り、寒さも身に

しみる季節となっていましたが、各国の心温まる料理に感激し、参加留学生は外の寒さも忘れ、とても楽しそうでした。

(田村悟：TAMURA, Satoru ― 留学生係長)



写真：新留学生歓迎パーティーより

● 農家に泊まろう

2009年10月3日・4日と11月7日の2回に渡り、「秋田の農家民泊——体験から持続的交流へ」を実施しました(主催:秋田地域留学生等交流推進会議)。県内高等教育機関4校から、留学生・日本人学生・教職員等、合計35名が参加し、仙北市西木町で農作業を体験しました。

● 農業体験ツアー.....

1回目のツアーでは、5軒の農家に分かれ、農作業と農家民泊を体験しました。あいにくのお天気でしたが、大豆の仕分け、米のもみずりや袋詰めなど、ごく日常的に行われている農作業を体験でき、かえってリアルな農業体験となったようです。

翌日は参加者全員が集まり、体験を共有するとともに、西木町の、特に外国人対象のグリーンツーリズムをさらに発展させるための、改善点を提案し合いました。



● 収穫感謝祭ツアー.....

第2回目のツアーには、再度同じメンバーが参加し、収穫物を使った料理作りを体験しました。私自身は体調不良で欠席しましたが、西木町の農家の方々が大勢参加してください、また本学教育文化学部のテリー・ナガハシ・リー准教授のリーダーシップのもと、非常に充実した体験内容になったとのことでした。

同メンバーによる2回目のツアーということもあり、最後は農家の方々や参加者同士が別れを惜む、感動的なフィナーレであったそうです。

なお、本事業の実施には西木町のグリーンツーリズム西木研究会にご協力をいただき、企画・運営は本学国際交流センターが中心となって行いました。

(牲川波都季:SEGAWA, Hazuki — 国際交流センター)

● 世界各地の協定校が秋田に集結

● 国際交流シンポジウム開催.....

2009年10月22日、世界9か国11大学から学長・国際交流担当副学長等を招聘し、秋田大学国際交流シンポジウムを開催しました。本学創立60周年記念行事の一つとして開かれたもので、国際交流協定校および協定締結予定校との相互交流推進を目指しました。



● 各国大学の国際交流の現状はいかに.....



吉村学長が「協定校等との交流を深め、留学生の増加につなげるとともに更なる国際交流の発展を図りたい」と本学の方針を伝えた後、各大学の

国際交流の現状が紹介され、その後は活発な意見交換が行われました。

● 英語による教育プログラムが必要か.....

留学生受入れには、英語による教育プログラムの拡大、英語教育の充実、教育環境・生活環境の整備、組織の充実が重要であり、さらに留学生受入れ拡大に向けた積極的な取り組みが必要であるとの指摘がありました。(国際交流係)

● 新たに4大学と国際交流協定を締結

● ポハン工科大、モンゴル科技大、ケミ・トルニオ応用科学大

10月22日には、ほかにポハン工科大学校(韓国)、モンゴル科学技術大学(モンゴル)、ケミ・トルニオ応用科学大学(フィンランド)と「学術交流に関する協定」および「学生交換に関する覚書」を締結しました。これで本学の大学間協定校は12ヶ国25校となりました。



ポハン工科大学校とモンゴル科学技術大学に関しては、大学院レベルでの研究者・学生交流、ケミ・トルニオ応用科学大学に関しては、学部レベルの学生交流が活発になると期待されています。

(牲川波都季:SEGAWA, Hazuki — 国際交流センター)

● ボツワナ国際科学技術大.....

2009年10月23日、秋田大学はアフリカ南部のボツワナ国際科学技術大学と「学術交流に関する協定」を結びました(ボツワナ国際科学技術大学は、地下資源が豊富に眠るボツワナの地下資源開発を担う人材を養成するため、2011年3月に開校する予定です)。この協定により、教職員・研究者・学生の交流促進をはじめ、資源開発等の研究において、相互に協力を図っていくことになりました。

(宮本律子:MIYAMOTO, Ritsuko — 副センター長)

国際交流を後押し——教育研究高度化支援体制整備事業が採択されました

平成21年度補正予算による研究拠点形成費等補助金事業に「国際的な高度資源関連指導者・技術者の育成を目指した国際交流と教育研究支援体制の整備」を目的としたプロジェクトとして、工学資源学部、産学連携推進機構及び国際交流センターの連携事業として応募した結果、2億9千万円（間接経費を含む）の補助金の交付が決定した。

本センターとしては、この事業費を有効に活用して「国際化」に向けた取り組みを加速するため、(1)秋田大学国際交流シンポジウムの開催、(2)国際連携コーディネーターの採用、(3)海外学生交流事業及び各種国際交流事業の支援、(4)遠隔会議システムの導入、(5)学習用視聴覚機器の購入など、国際化推進に繋がる諸施策を展開することとしているが、今後その成果に期待したい。

(石川勉：ISHIKAWA, Tsutomu — 国際交流課長)

● 韓国への出張報告……………高村竜平

10月24日、国際交流センターからの渡航費援助を得て、韓国日本文化学会に出席する機会を得た。この学会は本学の協定校であるハンバット・円光両大学を含む地方大学の日本関係学科教員を中心に構成されており、筆者はシンポジウム「韓日大学間交流の現況と展望」で本学の事例を報告するよう要請されていた。

筆者は、センター開設により教育内容を多様化させることができたこと、センター職員や学生・市民による交流事業が行われていることを紹介し、一方で寄宿舎や担当教員の不足が深刻なこと、大学間協定があっても実質的には部局間交流にすぎないことなどを課題として挙げた。日本からはほかに東海大学札幌校、韓国から新羅大学と韓南大学の報告があり、日韓双方が相互の現状について知る機会として貴重なものであった。

(TAKAMURA, Ryohei—教育文化学部日本・アジア文化講座)

● 黒龍江大学での交流事業報告……………長沼雅彦

本年度から「中国文化論演習Ⅸ」として中国での語学学習と中国文化・社会の事情視察を兼ねた短期研修を新たに設置した。担当教員は、吉永、内田、長沼（ともに教育文化学部）である。今年度第1回は、黒龍江大学との交流の窓口を担当する長沼が担当した。

本学と黒龍江大学とはすでに20年の姉妹校の歴史があり、学生と教職員の交流が行われてきた。このことをきっかけに両校間がますます充実した姉妹校関係となっていくよう期待している。

さて、この度は、参加学生6名、引率補助1名と筆者である。研修コースは、(1)黒龍江大学での授業参加、書展



開催、および学生間交流（1週間）、(2)チチハル—札龍自然保護区観察、チチハル大学訪問、(3)満州里—内モンゴル大草原、国門等見学、(4)北京—長城、故宮博物館、明十三陵見学、瑠璃蔽資料蒐集である。

このような大規模の研修旅行を可能にしたのは、国際交流センターの補助があったからで、誠に有意義であり感謝している。

(NAGANUMA, Masahiko—教育文化学部日本・アジア文化講座)

● 国際連携コーディネータ決まる……………

また本補助金により、下記の世界各国・地域に6名の国際連携コーディネータを委嘱することができました。

高島勲（タイ、インドネシア）、藤木一枝（北米）、呉方芳（中国）、都亜矢子（ベトナム）、劉沖明（台湾）、デンベレル・ナムスライ（モンゴル）〔以上、敬称略〕

任期は10月1日から今年度末までで、本学と各国・地域とのつながりをさらに強める役割が期待されています。

専任教員からひとこと

牲川波都季 (SEGAWA, Hazuki)

昨年6月に着任した牲川波都季（せがわ・はづき）です。現在は、留学生教育プログラムの策定等に従事しています。主な研究領域は日本語教育史で、特に教育方法の背景にある理念を問題にしています。

文部科学省は、国内の少子化・労働人口不足対策の一環として、留学生三十万人計画を提起しました。しかし、日本人自身が子どもを育てるに適さない場所として日本を捉えて

いるのに、どうして海外から人を呼べるのでしょうか。人口減の食い止めと留学生増加は、実は同時に起こるはずというのが私の予想です。

本学も留学生数の増加を目指していますが、現在の学生・教職員が大学生活に満足してこそ、留学生も集まることでしょう。自分は何をすべきなのか。本学の国際交流の理念とともに考えていきたいと思います。（国際交流センター准教授）

国際交流センター・スタッフ紹介

● 河津基……………KAWATSU, Motoi

2009年9月から2年半の予定で勤務を開始しました。韓国に1年の留学経験があります。香港、台湾、シンガポール、秋田で日本語を教えていました。専門は音響音声学です。日本語の発音やアクセントを学びたい人いませんか。休日はアマチュア無線やボーイスカウト活動をしています。

● 船木麻理……………FUNAKI, Mari

2009年8月から秋田大学国際交流課のスタッフとして勤務しています。秋田大学教育文化学部国際言語文化課程の1期生です。職場では、マルチリンガルの留学生や教職員の方々と接し、良い刺激を受けています。ロウさんの中国語講座に参加し、8年ぶりに中国語にチャレンジしています!

● 婁華 (娄华)……………LOU, Hua

平成21年度秋田県海外技術研修員として、中国の甘肅省人民政府外事弁公室から参りました。甘肅省と秋田県は1982年に友好提携関係を締結しました。私は10月13日に秋田大学に来て、日本語を勉強しながら、7人の教職員に中国語を教えています。来年2月末に帰国する予定です。



写真：左から婁，河津，船木

お知らせ——留学生のみなさんへ

● 留学生相談室で「ミニ講座・お茶っこ飲み」開催中

国際交流センターでは、昨年度より「留学生相談室」を開設しています。一年程度で入れ替わる学生が多いこともあり、相談室の存在は年間を通して告知する必要があります。また相談室などというものは、とかく足を運びにくいイメージを持たれがちです。そこで相談室活動の告知と実際に足を運ぶ機会の提供を目的として、昨年度2期より「お茶っこ飲み」と「ミニ講座」を企画、実施しています。

お茶っこ飲みは文字通りお茶とお菓子を楽しみながら何でも話せる時間と場所の提供が目的で、ミニ講座の主眼は、様々な先生方の多様なお話をリラックスした雰囲気の中うかがい、知識を深めたり友人を作ったりすることにあります。これまで以下の先生方にお話しいただきました。宮本律子(カルチャーショック)、日高瑞穂(秋田弁)、柴田健(ストレス対処)、原義彦(異文化体験)、碓子洋行(図書館利用法)、テリー・リー・ナガハシ(英語学習法)、石井照久(ホヤについて 以上、敬称略) 12月以降は、佐藤時幸、エマ・シモナ・モリタ、佐藤稔先生が担当の予定です。来年度からはより多くの先生方にご協力をお願いすることになるかと思えます。今後増加が見込まれる留学生に対するケアの一環として、何卒よろしくお力添え願います。

- 留学生相談室 毎週金曜16時10分～17時40分
- お茶っこ飲み 毎週金曜16時10分～17時40分
- ミニ講座 月1～2回程度、16時10分から開催
(佐藤雅彦 — 日本語教育担当教員)

Information for International Students

● Welcome to Petit Lecture & Ochakko-Nomi Party!

The International Exchange Center found the **Counseling Room** for international students last year. We have held some events to introduce the roles of this Counseling Room, which are **Petit Lectures** and **Otchakko-Nomi** (Tea Time) Gatherings.

The goals of the Otchakko-Nomi Gatherings are giving opportunities in which international students and Japanese students can spend relax time and talk each other with some tea and snacks.

In Petit Lectures, professors of Akita University give short lectures of interesting topics, and participants discuss about the topics frankly and freely. Everyone can expect to get new friends as well as new knowledge about interectual topics. We are planning to hold next Petit Lectures on 18th December and 22nd January, 2010.

We are looking forward to meeting you in the Petit Lectures and Ochakko-Nomi Gatherings.

- **Counseling Room for International Students:**
16:10 - 17:40, Every Friday.
- **Ochakko-Nomi Gatherings:**
16:10 - 17:40, Every Friday.
- **Petit Lectures:** 16:10 -, 1 or 2 times per month.
(SATO, Masahiko: Japanese Language Lecturer)

秋田大学の留学生数 (2009年12月1日現在)

▶ 学部生：66名 ▶ 大学院生：35名 ▶ 交換留学生・研究生等：28名 **計：129名**